

「生きがい」について

私の高校時代の仲間にはメール網があり、同期会や同好会の連絡あるいは個人の意見や写真の投稿など活発です。7年ほど前からは毎年テーマを決めて順番に発信もしています。今年のテーマは「生きがい」。以下は8月に順番が回ってきて投稿した私の原稿(若干加筆)です。誰にとっても大事なテーマだと思うのでこのページにも転載した次第です。

投稿原稿

今回は「生きがい」という哲学的な難しいテーマを与えられ、これまでの皆さんのレポートを読みながら自分にとってはどうなのか考えてみました。いろんな要素を挙げていってみると、どうも「大きな生きがい」と「小さな生きがい」の2種類あり、概して「当面の目的があり、忙しく緊張しているところに生きがいはある」ような気がします。

では自分にとって「大きな生きがい」とは——三つあります。夢またはゴールと言えるかもしれません。

- ① 創価学会創立 100 周年となる 2030 年まで世界広布(平和)の活動にできるだけ貢献し、ちょうど 90 歳で PPK (ピンピンコロリ) を目指すこと。
 - ② 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの際、ボランティア通訳として大会のどこかの部門で貢献すること。
 - ③ その前年 2019 年には結婚 50 周年を迎える。そこでお世話になった人たちを金婚式に招待し感謝を伝える。また旅行は現役時代に 10 年間駐在したパナマへ。一緒に頑張りお世話になった現地の学会メンバーへ激励と感謝の旅をすること。
- ① について：



20 歳の時に創価学会に入会しこの 8 月でちょうど 56 年になります。この間、学会はいろんな歴史を経てきました。困っている人を救い、広宣流布(仏教を通して世界平和を築いていく)の活動が、一時期、一部マスコミから叩かれ批判され、それを鵜呑みにした一部市民からも偏見の目で見られてきました。もちろん、学会も不行き届きの部分もあったかもしれませんが。でも、私は半世紀あまりその内部にいて、創価学会は一人ひとりの幸せと人類の平和に貢献するという崇高な目的を持った善人と善意の団体だと心から思っています。

現在、世界のほぼすべての国に SGI(創価学会インタナショナル)メンバーがいて、それぞれの国や社会から評価されています。国内でもようやく学会への視線が批判から尊敬に変わりつつあるような気がします。それを見届ける 100 周年まで頑張っていきたい、との願望です。



(写真左上：信濃町にある大誓堂。毎日、約 1000 人の国内の会員と世界各地からも平均 50 人ほどの SGI メンバーが訪れています。写真右下：釈尊生誕の地インドのデリー近郊の創価菩提樹園にある「世界平和の碑」——筆者も昨年 11 月訪問しました)

② について：

世紀の平和の祭典に、これまで10年あまりの海外体験や語学（英語・スペイン語）が役立っていけばこんな嬉しいことはありません。もし実現すれば自分の“現役”としての活動の最後となるでしょう。希望者が多く選考はかなりの倍率になるようなので、この4月から「東京都観光ボランティア」として実績を積んでいるところです。そのため体力作りもしていかななくちゃ。



③ について：



このテーマについては書きたいことがいっぱいあります。これまでもこのページ「気まま随想」に綴ってきました。

もし一家の主が高齢で亡くなった場合、残された家族は葬儀社の手配から参列者を迎える準備に追われ、故人を偲び悲しんでいる間もありません。亡くなった本人も“主人公”がいないところに弔問を受けるよりも、まだ元気で動ける間に心ゆくまで語り合った方がはるかに有意義ではないかと思うのです。

そこで生きている元気なうちにお世話になった関係者を金婚式に招待する。「感謝を伝える」のですからご祝儀もなく費用はすべてこちら負担。会場には家の近くにある素敵なホテルを予約し、宴会場の前面には「お世話になった皆さまに感謝を捧げる集い」、後方には「ありがとうございます。皆さまのお陰でここまで来ることができました」との文を掲げる。

“披露宴”では演奏会で腕を上げている子供や孫の演奏に自分もギターで加わり盛り上げていく。来てくださった皆さまには、お礼の言葉のほか、それまでにホームページで紹介してきた主な記事と写真を「清水武全集」として編み記念に差し上げる。そうすれば「人生の中で最も楽しい納得のいく一日になる」と思うのです。

次に「小さな生きがい」とは日常の中での小さな喜びにも通じるようです。

- ◇ 「自分の経験を生かす場があること」。私の場合、特派員時代の体験が世界文学紀行を可能にしてくれました。それに大誓堂に來日する海外メンバーのアテンド、市が運営するシニア向け英会話教室の講師、地元の中学校の英語授業の支援、東京都観光ボランティアとして訪日外国人のお世話、昭島稲門会（早稲田の校友会）の会報編集などです。

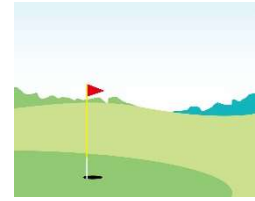


- ◇ 「自分を表現する場があること」。文学紀行やエッセイをホームページを通じて発信できること。各地での講演、グループで老人ホームを訪ねギター演奏・・・など。どれもこれまでの経験や知識を活かし相手に役立つ、または喜んでもらう活動です。

- ◇ 何かを新しく作り出す「創造の喜び」も生きがいに通じていきます。

- ◇ 孫の成長を楽しむ——3人の子どもに幼稚園から高校まで計4人の孫（男女2人ずつ）がいますが、それぞれ特徴がありそれなりに頑張っている。お年玉だけでなく、おりおりに激励の言葉をかけたり記念の品をあげたりするのも楽しい。

- ◇ 自家菜園——写真入りのメールで何回も報告していますが、畑に行って野菜の手入れをするとき“ああ、ずいぶん大きくなった”と 一日一日成長していくのを見るのもささやかな喜びで生きがいに通じます。
- ◇ 趣味のスポーツ——テニスのゲームで自分の打球が相手コートに思うように入ってスコアを得たとき。ゴルフでティショットが真っ直ぐに距離を飛んだときの快感！ 「パー」を取ったときの喜び！ 「バーディ」なんか出たら有頂天！
- ◇ 料理の腕前(?)の披露——来客があり、自分が作った料理を「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」と褒められたとき。
- ◇ 助けを必要としている人の力になれたとき——自分一人の喜びより他人の幸せのため貢献できた喜びの方が大きいような気がします。



等々、考えてみると普通の生活のなかにいっぱいあります。

医学の進歩は人生を長くしてくれました。でも長くなった人生をどう過ごすか医者は教えてくれません。その中で、先日亡くなった日野原重明氏は多湖輝氏との共著で「長生きすりゃいいってもんじゃない」と望ましい生き方と人生の終え方を提言していましたが、氏はその通り実践した生を終えられました。



人生でどれだけ**価値を創造**したか——これも「生きがい」を考える一つの視点ではないでしょうか。

以上